

「驚くべきみ光に招かれて」

出エジプト記
ペテロの第一の手紙

19章 1節～6節
2章 1節～10節

説教

岩田昌路 牧師 (日本基督教団狛江教会)

ペテロの名による手紙から御言葉を与えられました。ペテロはガリラヤの漁師でしたが、主イエスに「わたしについて来なさい」と呼ばれ、主の弟子とされた人です。後に初代教会の使徒とされ、殉教したと言われます。ある人はこの手紙の頂点がここにあると言います。ここにペテロが息をのむ思いで見つめているものがあります。それはある建物です。目に見える建物ではありません。目に見えない霊的な家です。

聖なる公同教会を信ず。私達もペテロとともに霊的な家を見つめています。それは地上において見えるどんなものよりも壮大なものです。主が恵み深い方であることを味わいながら、私達自身も霊的な家の部分とされている恵みを味わうのです。キリストを信じることと教会を信ずること。キリストに仕えることと教会に仕えること。本来これらは一つのことです。全国教会青年同盟・西日本教会青年同盟も、「キリストと教会に仕える」という変わらぬ主題の下で青年伝道の歩みを続けてきました。

この箇所のキーワードは「石」です。これは第一に主イエス・キリストを表わす言葉です。ケファ(岩)と呼ばれたペテロが、旧約聖書に記される「石」を用いてキリストを記したことは印象的です。「家造りらの捨てた石」「つまづきの石」「さまたげの岩」という言葉は、主イエスの十字架の出来事と、神の救いに対する人間の無理解を表します。しかしその石が「隅のかしら石」とされます。「隅のかしら石」を土台にして霊的な家が建てられます。復活された主イエス・キリストを土台とする教会が形成されます。「隅のかしら石」の上に「生ける石」が積み上げられます。「生ける石」とは私達のことです。そこに救われた私達の姿が見えてきます。

ジュネーブの宗教改革者・ジャン・カルヴァンは、大著『キリスト教綱要』の本編、第1章のはじめに、「神を知る知識と我々自身を知る知識は結びあった事柄である」と述べています。カルヴァンの神学の結晶ともいえるべき言葉です。神を知ることこそが私達自身を真実に知ることに通じているというのです。つまり自分自身を見つめるだけでは本当の自分を知ることにはならないということです。このことはまさしくペテロが驚きに満ちた光榮な思いをもって、ここで記していることと重なることです。

洗礼を受けるとはどういうことか。新たに生

まれさせられることです。もちろん、私達は洗礼を受けたあともなお罪を犯します。愚かで弱い自分であり、限りある命に生きていることも変わりません。しかし私達が新しい存在とされることは目に見えない霊的な事実なのです。私達は目に見えない神を信じるだけでなく、新たにされた自分や仲間たちの目に見えない霊的な姿を信じることに招かれているのです。

私達が「生ける石」として霊的な家に造り上げられているという壮大な事実を、ペテロは「暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざ」(9節)と記しました。暗やみから驚くべきみ光へ。主イエス・キリストの福音は、私達に一大転換をもたらしたのです。この世には私達人間を覆い尽くす暗やみが、厳然としてあります。人間を滅びへと引き込む罪と死の暗やみです。しかし、私達はもはや暗やみの中にたえず暮らすものではなく、驚くべきみ光の中をともに生きるものとされたのです。なんと素晴らしいことでしょうか。

ペテロは、教会という信仰の共同体を次のように表しました。「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。」(9節)出エジプト記19章をはじめ、旧約聖書に記された宝のような言葉です。その中でもひとときわ私達の心をとらえるのは「祭司の国」です。新共同訳では「王の系統を引く祭司」と訳されています。直訳すると「王的な祭司」5節に「聖なる祭司」と記されていますので、「祭司」という言葉にペテロの思いが込められていることは確かです。

あなたがたとは、信仰者すべてのことです。旧約の時代のように特定の人が祭司や王として選ばれるわけではありません。教会に連なる一人ひとりが、神の国の王子・王女であり、同時に執り成しの務めに生きる祭司とされます。だれもが罪の赦しの福音をつけ、永遠の命への希望を証しすることへ招かれています。新来者・求道者の方々にも一日でも早く洗礼を受け、「生ける石」として神の救いのみ業に加わってほしいのです。私達は今朝も、驚くべきみ光の中でお互いの顔を見つつ、新しい存在とされていることを喜び合うことができるのです。

(記 岩田昌路)